

御明神総合施設大型改修の竣工

持続型農業生産技術分野長 准教授 平田 統一

かねてからの課題であった御明神総合施設の大型改修が令和4年度末に竣工しました。御明神総合施設は、昭和47年12月に経済農場、御明神演習林、山地利用研究施設合同の総合施設として落成し、昨年50年目を迎えた古い建物で、雨漏りや現状の実習・研修の実施にそぐわない環境が課題となっていました。関係各位のご尽力により幾多の困難を乗り越え、約1年の間、教育・研究・普及活動への影響を最小限に建物の半分ずつを、事務室を引っ越しながらの工事となりました。

回収の目玉の一つは、教室を拡幅し、腰板に県産木材を使用したことです。これまでの教室は定員30名程度でしたが、実際には机が密着する状態でした。共同獣医学科（東京農工大学）の宿泊実習等では40名程度になることもあり狭隘でしたので大変使い勝手が良くなりました。また、エアコンにより冷暖房を完備しました。雫石は夏暑く、冬寒いのでこちらも勉学環境の改善になりました。宿泊室は8人部屋でエアコンを設置し、別に個室も準備しました。大人数で使用する風呂に加えて、個別に使用できるシャワー室も備えました。近年様々な事情で宿泊、入浴を同級生と一緒にできない、あるいは集団生活に馴染めない学生も散見されますので、これらに柔軟に対応できる施設になりました。さらに、トイレは余裕を持った明るい清潔な空間になり、多目的トイレも整備されました。洗顔・洗濯室も男女別になるなど、使い勝手が上がりました。

竣工後には宿泊棟などに湿気が籠もりカビが生えるなどトラブルもありましたが、迅速な対応により環境も落ち着きつつあります。御明神総合施設では多くの日帰り、宿泊による実習、社会人を対象としたリカレント研修会が開催されています。使い勝手が良くなった施設で今後益々活発な活動が繰り広げられると期待されます。



大型改修を終えた御明神総合施設

第4回 大学農場で体験する食と農と生物学

持続型農業生産技術分野 助教 渡邊 学

昨年に引き続き、「第4回 大学農場で体験する食と農と生物学」を7月26日（水）に開催しました。本公開講座は、フィールド実習教育の体験を通し、生きるために欠くことのできない食と、それを支える農に対する理解を深める場を提供することを目的としています。

参加者は、岩手県の高校生8名（学年の内訳：3年生3名、2年生5名）で例年よりも少なかったです。午前中、自己紹介の後、農場内を見学しました。また、ブルーベリーを収穫しながら品種ごとに食べ比べしました。昼食後、農場所属学生（修士2年生1名、修士1年生2名、学部4年生1名）による1分間研究紹介を実施しました。その後、由比教員と渡邊がそれぞれ野菜と果樹について講義しました。最後に、ブルーベリーのジャム作りを体験しました。参加者は、ブルーベリーとブルーベリージャムをお土産に持ち帰りました。

終了後の独自のアンケート（大変満足～大変不満の5択）では、全員が「大変満足」を選択していました。自由記述の感想では、「有意義な体験をできた。」という内容が多くみられました。これまでと同様、所属学生による研究紹介も好評で、学生が研究で試行錯誤している様子に感心したという感想などがありました。なかには昨年に続いて参加した生徒もあり、岩手大学農学部への進学希望とのことでした。例年、農作物の生育状況から最も暑い時期に開催してきましたが、ここ数年の猛暑では熱中症になる心配もあり、特に今年は参加者が少なかったことから、アンケート結果を参考に日程の変更も含めて検討したいです。



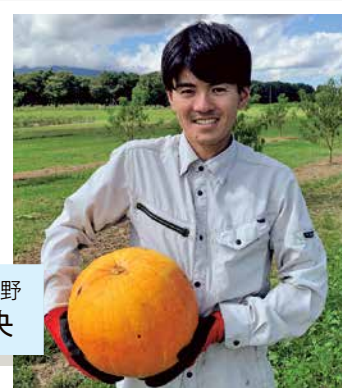
水稲の出穂状況を観察

新任技術職員の紹介

本年4月に採用になり、岩手大学農学部技術職員として、滝沢農場に配属された原怜央です。私は、昨年度、岩手大学農学部食料生産環境学科を卒業しました。現在は、週に数回の実習に加えて、主に花や野菜を担当しています。分からないことばかりで不安も多いですが、先輩の職員の方々に支援していただきながら、新しい発見をしたりすることもでき、充実した日々を送ることができています。

今後まだまだ覚えることも数多くありますが、多くの経験をしながら、先輩の職員の方々のようにスムーズに仕事を進め、周りの方々に信頼される技術職員を目指して、毎日取り組んでいこうと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

本年4月に採用になり、岩手大学農学部技術職員として、滝沢農場に配属された原怜央です。私は、昨年度、岩手大学農学部食料生産環境学科を卒業しました。現在は、週に数回の実習に加えて、主に花や野菜を担当しています。分からないことばかりで不安も多いですが、先輩の職員の方々に支援していただきながら、新しい発見をしたりすることもでき、充実した日々を送ることができています。



持続型農業生産技術分野
技術職員 原 怜央

研究 トピックス

大学生の農場実習において メンデル遺伝の基本を体験する プログラムを構築する

持続型農業生産技術分野 技術専門員 中西 啓

農業生産を支える品種改良や遺伝学への理解と関心を深めることを目標に、大学生を対象とした「メンデル遺伝の基本を体験するプログラム」を実施し、実習への導入と教育効果について検討した。

本実験では、学生を2グループに分け、ミニトマトF₂集団の遺伝分離を調査させた。また、両グループには事前に与える情報の内容を変えて実験開始時と終了時に、メンデルの法則の理解度についてアンケート調査を実施した。

調査結果は、葉色は緑色と淡緑色、果実色は赤色と橙色および黄色の個体が確認され、上記の2形質の組み合わせでは6組の個体群に分離した。これらの分離比には、メンデル遺伝の分離比と大きく異なるものもあり、その原因などについてはさらに検討が必要である。メンデルの法則の理解度の調査結果は、実験開始時に品種名、世代(両親・F₁・F₂)の品種特性を知らせたグループの平均点が、品種名と世代のみを知らせたグループより高く、実験終了時の調査も同様であった。これらの結果を受けて、十分な教育効果を得るための指導方法について検討を進める予定である。



トマトの形質を調査する学生

リンゴの摘果における 効果的な指導方法の開発

持続型農業生産技術分野 技術専門員 吉田晴香

リンゴの栽培上重要である摘果について、限られた実習時間の中で効果的に理解させる指導方法を開発しようと試みた。事前テスト、写真による説明、実物による説明それぞれの有無により、8つのグループにわけて試験を行い、終了後にアンケートを実施した。

試験の結果、摘果の理解度は43~100%で、そのうち80%以上の理解度を示した学生は56名中30名であった。各処理の有無およびグループ間において摘果の理解度に有意な差はみられなかった。事後アンケートの結果、現場での説明が最も摘果の理解につながったと回答している学生が多かった。加えて、事前学習としての効果が小さい「事前テスト」と「写真による説明」については今後省略しても差し障りないことが示唆された。

一連の結果から、現行よりわかりやすい資料を作成し、事前に専門用語を確実に定着させた上で、少人数のグループに種々のタイプの枝について説明しつつ、学生と相互にコミュニケーションを取りながら現場での説明を行うことで学生の理解度が高まるのではないかと考えられた。



グループごとに摘果する学生